

内集団ひいきにおける BGR モデルの再検討

大迎わかな

指導教員 三船恒裕

研究背景

人は内集団に対して外集団より協力的に振る舞う傾向があり、BGR モデルはこの内集団ひいきを「所属集団が相手に知られている場合にのみ生じる」と説明してきた。しかし近年、所属集団を知られていない場合でも内集団ひいきが生じることや、FNE との関連が見られないことが報告され、モデルの妥当性に疑問が生じている。先行研究には文化的背景の差や実験環境の違いがあるため、これらを統制した再検討が求められる。

研究目的

本研究の目的は、先行研究と文化的背景の差や実験環境を統制した上でデータを収集し、BGR モデルおよびその心理的メカニズムとされる評判仮説・期待仮説の妥当性を再検討することである。具体的には、知識共有条件と知識非共有条件の双方で内集団ひいきが生じるかを検証し、FNE が内集団ひいきと関連するという評判仮説の予測を再評価する。また、内集団への期待が協力行動に影響するという期待仮説が再現されるかを検討し、内集団ひいきの心理的基盤をより精緻に理解することを目指す。

研究方法

本研究では、日本の成人 509 名（平均年齢 44.60 歳）を対象にオンライン実験を実施した。参加者はインフォームド・コンセント後、絵画選好課題により最小条件集団にランダムに分類された。その後、架空の相手と行う囚人のジレンマゲームに参加し、集団（内／外）×知識（共有／非共有）に統制条件を加えた 5 条件をランダム順で経験した。さらに、相手から渡される金額の予測と、FNE 尺度 30 項目への回答を求めた。分析は全参加者と、操作理解テストに全問正解した参加者のみの 2 種類の分析を行った。

分析結果

期待金額では知識共有条件で内集団への期待が高く、期待仮説が再現された。一方、協力行動では知識の有無にかかわらず内集団ひいきが生じ、評判仮説の予測と一致しなかった。さらに、FNE と内集団ひいきの間に有意な相関は認められなかった。

考察・結論

本研究では、日本の成人を対象としたオンライン実験を通じて BGR モデルを再検討した。その結果、内集団への期待は知識共有条件で高まり期待仮説は再現されたが、協力行動は知識の有無にかかわらず内集団ひいきが生じ、評判仮説は支持されなかった。また、FNE と内集団ひいきの関連も確認されず、従来知見は再現されなかった。これらの結果から、理論の再検討が求められる。